

ラリタヴィスタラ「降魔品」における 欠落偈頌の還梵について

外 蘭 幸 一

1. 還梵の意義

「還梵^{かへぼん}」とは、失われた梵語原文を現存訳本に依拠して復元することである。

最初に梵語で書かれた作品の一部が、複数の「写字者」（古い写本を書写して新しい写本を作る人）の手を経て転写されてくる過程で、見落としや錯誤や意図的省略などにより失われてしまうことがある。あるいは、火災や廃棄や敗壞などにより、一つの作品が全体として消失してしまうこともある。そのような欠損部や原本不在の情報については、現存する漢訳やチベット語訳（西蔵訳；蔵訳）を参照することによって確認することができる。漢訳や蔵訳は存在するにもかかわらず、その原典たる梵本が存在しない場合（どこかに存在しているかもしれない原本が未発見であることもあるが）、その原本全体を復元する試みは非常に困難であり、ある意味で不可能とさえ言えるであろう。しかし、ある作品の中の、さほど大きくない部分のみが欠落している場合は、その箇所を復元することが可能な場合がある¹。

しかし、たとえどれほど小部分であったとしても、その還梵作業は非常に困難を伴うことが予想される。また、たとえ何とか還梵できたとしても、それが原文を正確に復元し得たものであることを確認する手段は皆無である。還梵作業が非常に困難を伴う理由はひとえに梵語自体の複雑さにあり、その復元の正確性が保証されない理由もやはり梵語表現の複雑さにあると言えるであろう。

辻直四郎によれば、梵語は次のような特徴を持っている。

- ① 古典梵文学の主要部分は韻文からなり、平易な散文体に乏しく、語順に関しても厳格な規定を欠いている²。
- ② 梵語の語彙は異常に豊富で、数千年来蓄積された梵語の語彙は実に驚歎すべき量にのぼっている。かつインドの宗教・哲学・学術はおのおの独特の術語・語義を発達させ、専門家といえども多部門にわたってこれを習得することははなはだ困難である³。

キーワード：ラリタヴィスタラ、還梵、仏教梵語、混淆梵語、韻律

¹ 例えば、那須實秋「唯識二十論の還梵」（『印度学仏教学研究』3号（1953、113-114頁）という論文がある。

² 『辻直四郎著作集 第四巻 言語学』（1982年、法蔵館）195頁。

³ 同上書、196頁参照。

③言語に対する考察が特に精密なインドにあっては、その語源的解釈も非常に複雑であり、従って梵語原典の存在しない場合には果していかなる原語を予想すべきか明瞭でないこともすこぶる多い⁴。

つまるところ還梵作業は、古典梵語の持つ複雑さによって非常に困難を伴うのであるが、仏教梵語（仏教混淆梵語）で書かれたはずの原文を復元する場合には、仏教梵語独特の文法や語彙にも制約されるので、その還梵はさらに困難であることになる。

そこで、「非常に困難が予想される還梵作業を行うことの意義は何か」という疑問が提示されるであろう。すでに消失してしまったものを復元する試みは、それが、現存する類似物との比較によって、確かに原物に近いものであることを確認できるのでなければならないが、その確認が得られるような場合であればあるほど、その類似物で間に合わせればよいということになりかねない。芸術品であれば、一度失われた名品を復元して再び鑑賞することができるようにすることの意義は大きいと言えるが、思想を伝える文献の場合は、同様な思想を伝える別の文献が現存していれば、それで間に合わせることが可能であるから、改めて同じような思想を伝える文献を復元する意義は少ないと言わざるを得ない。したがって、原本が全体的に（あるいは大幅に）消失してしまっている思想的作品を復元することは非常に困難であるばかりでなく、その作業に意義を見出すことも難しいと考えられる。その作品の概要は現存する訳本から知ることができるので、そこに盛られた思想内容もある程度分かるからである。ただし訳本は、そこに使用されている言語の特性に制約されているので、原語で書かれた内容がそのまま訳本によって伝えられているとは必ずしも言えない。例えば、漢訳は中国語の特性によって制約され、藏訳はチベット語の特性によって制約されているから、梵語で書かれた原典の内容をそのまま伝えたものとはならないはずである。それ故、原典を復元しておいて、改めて原語によって思想的文脈を確認することの意義は多少なりともあると言えるであろう。また、復元する作業のなかで、原語と訳語の関係に関する言語学上の知識や情報を収集することもできる。したがって論点は、その作業にかけたエネルギーに見合うだけの大きな意義があるかどうかという「コスト・パフォーマンス」（費用対効果）の問題に帰着することになる。

それに対して、ある作品の一部のみが欠落している場合、その部分を還梵する作業には相対的に大きな意義があると考えられる。まず、①一部を復元して全体的に欠損のない状態に戻すことは、芸術的欲求に見合う作業である。欠けた部分があることは全体の価値を減ずる事象であるから、それを修復したいという欲求を満たすことには意義がある。②コスト・パフォーマンスの観点からも、一部を復元するだけのエネルギーはさほど大きくなくて、しかも前後の文脈をつなぎ合わせるという意味での大きな成果が期待できる。③復元する作業のなかで、原語と訳語の関係に関する言語学上の知識や情報を収集することは、大幅な復元作業ほど意義が高

⁴ 同上書、211頁参照。

いが、小さな復元作業であっても、その意義のあることを認めることができる。また、韻文を復元する場合、④韻律を通じて原語を特定することが可能になる場合があるが、そのような特殊な情報を得ることができるという意義も小さなものではない。

還梵には、以上のような多面的意義があると考えられる。そして、本稿において試みる還梵は、ラリタヴィスタラの「降魔品」に見られる韻文の8偈相当分の欠落を対象とするものであり、非常に小さな部分の復元作業であるが、それなりの意義を持つ作業であると言える。

2. ラリタヴィスタラの内容

ラリタヴィスタラは大乗仏教の立場から仏陀釈尊の伝記を描いた梵語の経典であり、漢訳には古訳としての『普曜経』と、『普曜経』よりも梵本に近接する内容の『方广大莊嚴経』がある。また、梵本と殆どそのまま合致する藏訳がある。

ラリタヴィスタラは現存の形としては27の章から成る比較的大部の作品であり、全体にわたって梵語原典からの和訳を一冊にまとめた訳書はまだ刊行されていない⁵。筆者は30年近くの年月をかけて、各章ごとの原文校訂と和訳の作業を遂行し、勤務する大学の紀要に順次発表してきたが、2017年（平成29年）9月をもって、ようやく最終章（第27章）までの作業を終了した。したがって、ラリタヴィスタラの和訳作業も全体的に終了しており、本学（鹿児島国際大学）の機関リポジトリを通じて、第15章から第27章までの内容を確認できる状況になっている。第1章から第14章までは、すでに『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（平成6年、大東出版社）として刊行したので、それによって内容を確認できる。

27の章の題目を、漢訳（方广大莊嚴経）が掲げる「品名」（章題）も付して示せば、次のような順となる。

第1章	Nidāna-parivartaḥ（序品）	漢訳「序品」
第2章	Samutsāha-parivartaḥ（〔下生〕勸告品）	漢訳「兜率天宮品」

⁵ フーコー（Phillipe Édouard Foucaux）は、ラリタヴィスタラの藏訳のテキスト（1847）を刊行するとともに、それに基づく二つのフランス語訳（仏訳）を刊行している。最初の仏訳（1848）は、多くの削除を含む藏訳テキストに基づく不十分なものであるが、第二の仏訳（1884）は藏訳だけではなく、三つの梵語写本をも参照しながら訳出されたものであり、かなり完成度の高い訳本となっている。ラリタヴィスタラの全体を現代語に訳出したものとしては、このフーコーの仏訳と、その仏訳から英語に重訳されたもの（*The Lalitavistara Sūtra, The Voice of the Buddha*, Tr. By Gwendolyn Bays, Vol. I & II, Berkeley, 1983）とがある（外園幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』、大東出版社、平成6年、168-176頁参照）。なお、フーコーの第二訳（1884）からの日本語訳として、溝口史郎『ブッダの境涯』（東方出版、1996）が刊行されている。これはフランス語に堪能な訳者による労作であるが、梵語原典からの訳出ではなく、上記の英訳と同様に仏語からの重訳であるための限界を免れず、仏典らしからぬ表現や誤訳が随処に見られる。

第3章	Kulapariśuddhi-parivartaḥ (清浄種族品)	漢訳「勝族品」
第4章	Dharmāloka-mukha-parivartaḥ (法明門品)	漢訳「法門品」
第5章	Pracalana-parivartaḥ (出立品)	漢訳「降生品」
第6章	Garbhāvakraṅti-parivartaḥ (入胎品)	漢訳「處胎品」
第7章	Janma-parivartaḥ (誕生品)	漢訳「誕生品」
第8章	Devakulopāyana-parivartaḥ (神殿参詣品)	漢訳「入天祠品」
第9章	Ābharāṇa-parivartaḥ (装身具品)	漢訳「寶莊嚴具品」
第10章	Lipisaṃdarśana-parivartaḥ (示書品)	漢訳「示書品」
第11章	Kṛṣṅrāmaka-parivartaḥ (農村品)	漢訳「觀農務品」
第12章	Śilpasamdarśana-parivartaḥ (技芸示現品)	漢訳「現藝品」
第13章	Samcodana-parivartaḥ ([出家] 勸發品)	漢訳「音楽發悟品」
第14章	Svapna-parivartaḥ (夢品)	漢訳「感夢品」
第15章	Abhiniṣkramaṇa-parivartaḥ (出家品)	漢訳「出家品」
第16章	Bimbisāropasamkramaṇa-parivartaḥ (ビンビサーラ来詣品)	漢訳「頻婆娑羅王勸受俗利品」
第17章	Duṣkaracaryā-parivartaḥ (苦行品)	漢訳「苦行品」
第18章	Nairāñjanā-parivartaḥ (ナイランジャンナー [河] 品)	漢訳「往尼連河品」
第19章	Bodhimaṇḍopagamana-parivartaḥ (菩提道場往詣品)	漢訳「詣菩提場品」
第20章	Bodhimaṇḍavyūha-parivartaḥ (菩提道場莊嚴品)	漢訳「嚴菩提場品」
第21章	Māradharṣaṇa-parivartaḥ (降魔品)	漢訳「降魔品」
第22章	Abhisambodhana-parivartaḥ (成正覺品)	漢訳「成正覺品」
第23章	Abhistava-parivartaḥ (讚歎品)	漢訳「讚歎品」
第24章	Trapuṣabhallika-parivartaḥ (トラプシャ・パツリカ品)	漢訳「商人蒙記品」
第25章	Adhyeṣaṇā-parivartaḥ (勸請品)	漢訳「大梵天王勸請品」
第26章	Dharmacakrapravartana-parivartaḥ (轉法輪品)	漢訳「轉法輪品」
第27章	Nigamaṇa-parivartaḥ (終結品)	漢訳「屬累品」

以上の章題から分かるように、ラリタヴィスタラという作品は、次のような物語として展開している。

第1章では、仏教經典の開始に共通の形式として、この經典がどこで誰に対して説かれたかということの説明から始まる。この經典は釈迦如来(釈迦牟尼世尊)が祇園精舎ぎおんしょうじやに滞在しているときに、舍利弗等しやうりふつの多くの上座長老と、弥勒菩薩を初めとする多くの菩薩摩訶薩に対して説かれたものであり、この經典は「自在天」(イーシュヴァラ)を初めとする八名の淨居天子の要請によって説かれた、という書き出しになっている。

第2章から本題の物語が始まる。まず、兜率天とそつてんにおいて法を講説している「一生補処いつしやうふじよの菩薩」

(釈迦菩薩) に対して、八万四千もの楽器と合唱の音響の中から、菩薩の下生を勧発する偈頌が聞こえてくる。その勧発を受けて、自分が誕生すべき清浄なる種族は「どこのどの種族であるか」を観察した菩薩は、ジャンブドヴィーパ(閻浮提)のシャーキヤ族(釈迦族)こそ誕生するにふさわしい種族であると決定し、兜率天から地上に下生してくる。菩薩はシュドーダナ王(浄飯王)の妻であるマーヤー妃の胎内に入り、ルンビニー園で母の右脇から誕生する。菩薩は神殿に参詣したり学校に入学して文字を学んだりしながら成長し、宮殿での娯楽を享受しつつも世の無常を知る経験をもする。やがて、十方世界に住する諸仏如来の鼓舞勧発を受けて出家した菩薩は、「世俗的権力を与えよう」というビンビサーラ(頻婆娑羅)王からの誘いを辞退して苦行林に入り、断食や止息による激しい苦行に身をゆだねる。過酷なる苦行の無意味であることを自覚した菩薩は、苦行を放棄してナイランジャンナー河(尼連河)で沐浴し、スジャーターの乳粥供養を受けて体力を回復したのち、菩提を得るべく菩提樹下の金剛座(菩提道場)に赴く。菩提道場においてマーラ(悪魔)からの誘惑や攻撃を撃退したのち、菩薩は遂に「無常正等覚」(最上の正しい完全なる悟り)を得て仏陀(如来)となる。その正等覚に対する諸天神からの讃歎を受けた釈迦如来は、自らの悟りを悦楽する三昧にひとりつつ六週間(第1の七日から第6の七日まで)を過ごす。第7の七日には、トラプシャとバツリカと名づける商人兄弟の食事供養を受けて、彼らに未来成仏の記(予言)を授ける。次いで、自ら悟った法の微妙にして難解であることを理由に世間に説法することを躊躇する釈迦世尊に対して、大梵天が「世尊が説法しなければ世界が滅んでしまう」と言っ、説法を勧請する。その勧請を受けて、釈迦如来はヴァーラーナシーの鹿野苑において、かつての修行仲間であった五名の賢者(五群賢者)に対して、「四諦八聖道」を初めとする初転法輪の説法を行なう。また、弥勒菩薩の求めに応じて、自らの法輪の特質を大乘仏教特有の思想や術語を用いて詳細に展開する。

終結部は、大乘經典に共通の「受持・読誦・書写等の功德の甚大なること」の強調と、「この經典を聴いて信奉する衆生は最勝なる導師たるべし」という自讃の偈をもって終了する。

以上のように簡略化して物語を概観してみれば、ラリタヴィスタラは他の諸仏伝と殆ど大差のない内容であることが明らかである。しかし詳細に観るならば、ラリタヴィスタラには大乘仏教の観点からの潤色が多彩に付加されており、大乘仏教の教理や語彙に精通していなければ正確に翻訳することは困難である。逆に言えば、ラリタヴィスタラは単に文学的価値を持つ作品ではなく、大乘仏教を理解するための思想的示唆に富む作品であり、それ故に、ラリタヴィスタラの内容を誤りなく理解し正しく翻訳することには、思想的に大きな価値があるのである。

ラリタヴィスタラを構成する27の章の中には、短い章もあれば長い章もあり、その差は非常に大きい。例えば第8章(神殿参詣品)は、レフマン校訂本(S. Lefmann, *Lalita Vistara*: 全体で444頁)でわずかに3頁余りしかなく、第9章(装身具品)に至っては2頁半しかない。

それに対して、第7章（誕生品）は42頁、第15章（出家品）は40頁、第21章（降魔品）は44頁、第26章（転法輪品）は36頁を占めており、非常に大部の章となっている。これら相対的に長い章は、作品全体のなかで重要な内容を成す部分であることは言うまでもなく、同時に多くの難解な部分を含む章であるとも言える。「誕生品」「出家品」「降魔品」が仏伝文学のなかで重要な内容を成すことは、他の仏伝と比較しても当然のことと言えるであろう。それらはいずれも仏伝物語のハイライトに当たる部分だからである。しかし、大乘仏伝としてのラリタヴィスタラにおいて注目すべきは、「転法輪品」の詳細さである。その中には大乘仏教の教理に関わる難解な語彙が総動員され列挙されており、まるで作品全体の構想が、この章を書くことを目的として着手されたかのごとき印象を受けるほどである。

本稿で還梵を行なう欠落偈頌は、ラリタヴィスタラの中でも最長の第21章「降魔品」のなかに見られるものであり、このような欠落が発生した理由の一つに、降魔品が非常に大部の章であったために、その一部を見落とす可能性も大きかったということが考えられる。

3. 降魔品の内容

ラリタヴィスタラの第21章「降魔品」⁶の内容は、次のように展開されている。

菩提樹下の金剛座（菩提道場）に坐した菩薩は、「もしわれが、マーラ（悪魔）に知られることなくして無上正等覚を証得するならば、それはわれにふさわしくあらず。われがマーラを挑発して、彼を降伏^{こうぶく}すれば、それによって欲界の天神はみな降伏せられ、魔界に属する天子たちも無上正等覚に対する心（菩提心）を起こすであろう」と思念して、眉間白毫相から「一切の悪魔の領域を破壊する」と名づける光線を発する。その光線の中から流れてくる、「菩提樹下に坐したるシュドーダナ王の息子は、自ら解脱して他者をも解脱せしむべし。その時、汝の都城は空無なるものとなるべし」という挑発の偈（第1～4偈）を聞いて、マーラは三十二相の不吉なる夢を見る。自分の敗北を予兆する、これら三十二種の夢から賞めたマーラは家臣たちを招集して、「シャーキヤ族に生まれた、かの菩薩が悟りを得たならば、わが国土を余すところなく空無ならしむべし。いざ、大軍勢を率いて出陣し、独りだけにいる、かの沙門を殺すべし」との偈（第5～9偈）を唱える。

出陣を促すマーラの命令を聞いて、サールトヴァーハ（商主）と名づけるマーラの息子は、「もし、あなたの夢がそれほど不吉なものであったのならば、攻撃を断念すべきである。たとえ独りであっても、剛強なる勇者は大軍勢に勝利する」との偈（第10～15偈）を説いて、マー

⁶ 「降魔品」だけを取り出して梵語原典（Lefmann 校訂本）からの和訳を試みたものとして、山岸俊岳「『ラリタヴィスタラ』降魔品の和訳」（『仏教学会報』第11号、高野山大学仏教学研究室、昭和60年、71-98頁）がある。これは蔵訳と漢訳（『仏本行集経』『方广大莊嚴経』）をも参照して和訳を試みたものである（外薮幸一、上掲書、176頁参照）。

ラを諫める。マールはその諫言を聞かずして、大軍勢を召集せしめる。

召集された軍勢は見るも恐ろしく、身の毛のよだつ風貌や奇怪な顔をした怪物どもであり、様々の武器を持ち、恐怖をかきたてる叫声を発し、「この沙門ガウタマを打ちのめし、縛りあげ、切り刻め」などと威嚇する。狐・豚・驢馬・牛・象・馬・駱駝・騾馬などの野獣のような顔貌を持ち、獅子・虎・熊・野猪・猿・豹・蛇・禿鷲などのような身体を有し、頭や腕や足などの数も少ない者が多い者が入り乱れている。耳・口・鼻・眼・臍の穴から毒蛇を出し、剣・弓矢・槍・三叉戟・斧などの武器を振り回し、菩薩をおどす。頭蓋骨を綴った首飾りを身につけたり、身体に毒蛇を巻きつけたりしている。焼けた銅や鉄の雨、矢の雨を降らせ、叫声を挙げながら菩薩に突進してくる。あるいは、老女たちが泣きながら菩薩に近づき、「起って、すぐに逃げなさい」と言い、羅刹女やビシャーチャ（食肉鬼女）の姿をした者たちが恐怖の念をかきたてながら、菩薩の前に殺到する。

このような恐ろしい魔軍の襲撃とそれに対する菩薩の態度に関する「重頌の偈」⁷（第16～24偈）が説かれる。それによれば、それら恐るべき風貌の容貌醜怪なる者どもを見ながらも、菩薩の心は少しも動揺することなく、安穩なる禪定に入り、虚空のごとき心を具足して、少しも迷乱することがない。

時に、マールには千名の息子（千子）があり、サールタヴァーハを初めとして菩薩に浄信を生じた者たちはマールの右側に坐し、父のマールに味方する者たちは左側に坐している。そこで、マールは自分の息子たちに「いかなる戦略を以て菩薩を攻撃すべきか」と呼びかける。まず、右側からサールタヴァーハが「安坐せる人王を攻めるのは、眠った獣王を起こすようなものである」と諫める。すると左側からドゥルマティ（悪慧）が、「われの視線に打たれるならば、生類の誰でも心臓が破裂する。菩薩も同様である」と誇る。次いで、右側からマドゥラニルゴーシャ（美妙音）がドゥルマティに「彼（菩薩）の面前では汝の両眼は開くことさえできない。たとえ大海を腕で泳ぎ渡り、その水を飲みつくすことが可能であろうとも、彼の無垢なる玉顔を面前に見ることはもっと困難である」と反論する。それに対して、左側からシャタバーフ（百腕）が「われに百本に腕があり、一本の腕から百の矢を放つ。かの沙門を射抜いてみせるから、安心して出陣すべし」とマールをけしかける。……以下、右側と左側から交互に、菩薩に味方する「和睦派」（清白の部）の息子たちと、マールを鼓舞する「戦闘派」（黒闇の部）の息子たちとが、それぞれ偈（第25～65偈）を唱えて激論をかわす。千名の息子たちがみな二派に分かれて論争するという設定であるが、実際には右側から14名、左側からは13名が偈を説いている。

その時、パドラセーナ（賢軍）と名づける、マール配下の将軍が「帝釈や梵天、阿修羅王やガルダ王、浄居天の天神などのすべてが菩薩を礼拝し、ハンサ（鶩鳥）・コーキラ（郭公）・マユーラ（孔雀）などが菩提の座を右邊し、月・太陽・メール山などのすべてが菩提の座に敬礼

⁷ 「重頌」とは「前に散文で述べた内容を重ねて韻文で示した部分」のことである。

をなしている。かの菩薩が勝利するのは必定であるから、マーラの軍は退却すべきである」との偈（第66～84偈）を説いて忠告する。これを聴いて、マーラは烈しく怒り、「彼はただ独りだけである。わが大軍勢を何ゆえ見ないのか」と反論する（第85偈）。すると、またも右側からマーラブラマルダカ（魔摧伏）と名づける、マーラの息子が「太陽や月、獅子や転輪聖王に味方は必要ではない。菩薩もまた味方を必要としない」との偈（第86偈）を唱えて諫める。

その時、菩薩はマーラ軍の勢力を減退せしめるために自分の顔を振り動かしたり、自分の頭を撫でたりする。その度に、マーラは驚いて逃走するが、「何でもないと気づいて戻り来たり、色々な武器を投げつけたり巨大な山を菩薩の上に投下したりする。しかし、投下された武器は花の瓔珞や天蓋に変化し、花吹雪となり花輪かづらの蔓となって菩提樹を装飾する。このような菩薩の莊嚴を見て嫉妬し羨望に害されたマーラは、「立ち上がって王権を享受せよ。汝の福德はわずかなものである。どうして解脱を得ることができようか」と、菩薩に言う。菩薩はマーラに対して「汝はただ一度の無遮施会むじせかいによって欲界の支配者となることができた。われは幾百千回もの無遮施会を設け、自分の手・足・眼・頭なども切り取って、乞う者たちに与えた。また、住居・財物・衣類・園林なども幾度となく与えた」と応える。マーラは「われが設けた無遮施会については、汝が証人であるが、汝の証人は誰もいないではないか」との偈（第87偈）で返答する。菩薩は「この大地がわれの証人なり」と言い、右手で大地を打ち、「わがために証言をなせ」との偈（第88偈）を唱える。菩薩の手が触れるや否や、大地は六種に震動し、スターヴァラー（堅住）と名づける大地の女神が、多くの女神と共に地面を破って半身を現出し、「その通りです。あなたの言うとおりであり、私たちはそれを現前に見ました。それどころか、あなた自身が全世界における最高の証人なのです」と言う。また、スターヴァラーはマーラを非難し、菩薩を称讃してから地下に隠没いんぼつする。大地からの声を聴いたマーラの軍勢は気が動転して遁走した、との偈（第89偈）によって、魔軍の敗北が描かれる。

マーラは次の作戦として、愛欲をもって菩薩を誘惑しようとする。マーラは自分の娘たちに「汝らは菩薩のもとに行き、愛欲をもって彼を誘惑できるかどうか試査しきさせよ」と命じる。魔女たちは菩薩の前に立ち、三十二種の婦女の媚惑を示現する。彼女たちは菩薩に乳房や臀部を見せたり、艶なまめかしく舞い踊り、あるいは幽艶ゆうあんなる声をもらし、羞恥を装ってみせたりする。また、少女、未出産の女、中年の女の姿を示現して、菩薩を誘引しようとする。要するに、魔女たちは様々の媚態を以て菩薩を誘惑するが、菩薩の心は全く動くことがない。そこで、何とか菩薩を魅惑しようとして、「あなたのために美しく着飾った天女を御覧なさい。魅力にあふれた美女を見て快楽を享受しないのは、せっかく宝を見つけたのに逃走するようなものであり、愚人のすることである」という意味の偈（第90～99偈）を唱える。菩薩は優美なる音声を以て、「愛欲は多くの苦悩の集積にして、苦の根本である。人間の肉体は尿や糞などの不浄なもの

⁸ 「無遮施会」とは「国王が施主となり、国内の誰にでも供養し布施する大きな祭り」である。

集まりであり、愛欲の故に女人の奴隷となることこそ愚昧なる者の所行である」という意味の偈（第100～110偈）を説く。

しかし、魔女たちはさらに情欲と淫靡とを現し、媚態を示現して菩薩を誘惑しようとする。この場面で、トゥリシュナー（渴愛）、ラティ（愛戯）、アーラティ（歓楽）という三名の魔女の名が提示され、彼女らが菩薩を誘惑する場面が重頌形式で描かれる（第111～115偈）。「今は春の季節となり、性愛による快楽を享受すべき時が訪れたり。牟尼の服装などは棄てて、快楽を享受されたし」と説く魔女たちに、菩薩は「われは法を歓楽すれども、感官の対象によって歓楽することなし」との偈（第116偈）で応える。以下、魔女たちと菩薩との間で、「愛欲の享受」の是非をめぐる論争が展開される（第117～126偈）。多種多様の愛の技芸を以てしても菩薩を誘惑することができない魔女たちは、遂に諦めて、慎みと羞恥心とを取り戻し、菩薩の足元に平伏し、「御身の誓願を成就して自ら彼岸に渡り、他の衆生をも渡らせたまえ」との偈（第127～128偈）を唱えて菩薩を讃歎する。魔女たちは父のもとに戻り、「菩薩への憎悪を棄てるべきである」との偈（129～130偈）を説く。

娘たちの言葉を聞いたマーラは落胆し忿怒にかられて、「どうして汝らの美貌を以て彼を菩提の座から起たせることができないのか」と責める。魔女たちは「彼は女人の過惡の甚大なることを知悉し、愛欲への執着がない。福德の光に満ちた彼を多くの天神たちが礼拝しており、彼が勝利するのは確実であるから、父よ、今日は退却するのが至当である」との偈（第131～137偈）を以て応える。

その時、菩提樹を守る八名の女神たちが、十六の相を以て菩薩の威徳を称揚する偈（139～146偈）を唱える。また、浄居天の天子たちが、十六の相を以てマーラの勢力を減退せしめる偈（第147～154偈）を唱える。さらに、菩提樹に仕える天神たちが、十六相を以てマーラの敗北を予言する偈（第155～162偈）を唱える。それにも拘わらず、マーラは退却せず、「この者を壊滅せしめよ。命を与えることなかれ」と呼号する（第163偈）。以下、「われはここにて菩提を証得すべし」と告げる菩薩と、「命令に従って退却せよ」と促すマーラとの間で、激しい論争が交わされる（第164～178偈）。また、恐ろしい形相の魔軍の襲来、それに対して全く動揺しない菩薩の姿、大地による証言、マーラの逃走、魔軍の壊滅の場面などが、重頌形式で再び描かれる（第179～196偈）。菩提樹を守る女神は、悶絶して倒れたマーラに水を注ぎかけ、「速やかに起き上がり、躊躇なく去るがよい」と告げる（197偈）。マーラは、「息子たちからの有益で親切な諫言を聞かずして、清浄なる人（菩薩）に罪を犯したるが故に、敗北と悲嘆と屈辱と落胆とを得るはめになった」との自戒の偈（第198偈）を唱える。女神は、「罪過なき者に対して罪を犯す者は恐怖と苦悩と敗北と落胆を得る」と説く（第199偈）。さらに、梵天・帝釈等の諸天神が菩薩の勝利を宣言する偈（第200～202偈）を唱え、最後に、「この戦闘で等覺菩薩（成仏直前の菩薩）の力と剛勇を目の当たりにした、非常に多くの者たちが無上正等覺への菩提心を発願した」との偈（第203偈）が説かれて終結となる。

4. 欠落偈頌について

以上のように、現存の降魔品には全部で203首の偈頌が含まれているが、古くから伝えられている韻文と新しく創作された韻文とが混合し、同様な内容の繰り返しがあるので、その分だけ長くなっているとも言える。そして、この中には計8偈の欠落が認められる。そのうちの2偈は一部を欠落するものであり、6偈は完全に欠落しているものである。

一部を欠落しているのは、上に示した203偈のなかの第18偈と第52偈である。

第18偈は元来6行より成る偈頌であったが、真ん中にあるべき2行が欠落している。恐らく、一般に一偈は4行から成るので、6行の中の2行が意図的か、あるいは無意識にか削除されてしまった結果であると思われる。ただし、直前の第17偈が6行から成っていることを勘案すれば、第18偈における2行の欠落は、意図的な削除ではなく、単に写字者の見落としであった可能性が大きい。

第52偈は元来4行より成る通常の形式であったはずのものであるが、わずかに最後の1行のみを残して上の3行が欠落している。この3行に当たる原文は、現存する写本の全てにおいて欠落しているので、かなり早期に失われたものと思われるが、蔵訳にはこれに当たる訳文があるので、蔵訳が成立した時点では、まだ原文が残っていたものと推定される。この3行欠落の原因は、やはり書写上の見落としであろうと思われる。

梵語写本には通常、散文部と韻文部とを区別する標識が特にない。「その時、次の如き偈を唱えたり」という文句や、「そこで次のように言われる」(tatrêdam ucyate)という重頌開始の文句があるときにのみ、偈頌(韻文部)が始まることが予知できるのであるが、それらの文句なしに偈頌が挿入されたり、一連の偈頌の終わりを告げるような標識が何もなくして韻文部が終了し、ただちに散文部(長行)が接続するような場合、偈頌と長行とを見分けることは非常に困難であることになる。そのために漢訳や蔵訳にも、偈頌を長行で訳してしまうという誤りが散見される。そのような困難さを抱える書写の作業のなかで、偈頌の形式について無知なる写字者は、偈頌には4行が必要であるということに気づかず、数行の不足を見落としたまま書写を続けてしまうということも起こる。その結果、わずかに1行のみの偈頌が残存するという奇妙なことが発生するのである。偈頌の「番号付け」(ナンバリング)は、写本を基にして校訂本を編集する際に編集者が行うのであるが、そのような偈頌整理の作業を通じて、特定の箇所が数行の不足によって偈頌の形式を満たしていないということが判明することになる。

この第52偈の欠落部3行については、ミトラ校訂本(Rajendralala Mitra: *The Lalita Vistara*, Calcutta, 1877)では何も言及されず、1行だけの偈として番号が付されている。レフマン校訂本とヴァイドゥヤ校訂本(P. L. Vaidya: *Lalita-Vistara*, Darbhanga, 1958)では※のマーク三個を付して、この偈に欠落があることが示されている。シャーストリーのヒンディー語訳(Śantibhikṣu Śāstri: *Lalitavistara*, Lucknow, 1984)は、全体にわたり韻文部のみについ

て梵語原文を掲載しているが、その書の当該部分には蔵訳から還梵された3行が括弧付きで挿入されている。

完全に欠落している6偈については、蔵訳からそのことが判明するのであるが、その部分については梵語原文が全く存在しないために偈番号を付けることができない。蔵訳を子細に分析することを通じて、その欠落が6偈相当分であることが判明するのみである。従って、もしこの部分にあったはずの6偈を加えれば、降魔品には全体で209首(203+6)の偈が含まれていたことになる。本論文で実際に還梵を試みるのは、実はこの6偈である。一部欠落の第18偈については、その前後の偈頌を参考にすることによって還梵作業は極めて容易であり、第52偈にいたっては、すでにシャーストリーによる還梵がなされている。しかし、完全欠落の6偈については蔵訳のみを参考に、その全体を還梵しなければならず、それに伴う困難さは一部欠落とは比較にならないほど大きい。

この欠落部を含む一連の偈頌は、二つの漢訳(『普曜経』『方广大庄严经』)のいずれにも訳出されていない。つまり、これらの偈頌はあまり古いものではなく、漢訳された当時のラリタヴィスタラの原文には含まれていなかった可能性が高い。しかし、還梵に際して漢訳を参考にすることができないということは、実は、それほど大きな不利を生じる事態ではない。漢訳は還梵に際して全く役に立たないというわけではないが、蔵訳に比べるとその参考価値は格段に低いのである。何故なら、一般に漢訳経典は逐語訳ではなく、適当に言葉を取捨選択しているために、意味上の適合性はあっても、語句の一つひとつを対校できるような厳密性を持つものではないからである。漢訳を見て梵語原文のおおよそを推量することはできるとしても、原文自体を復元できるような情報をそこから得ることはできない。それに対して、蔵訳は逐語的に訳出されており、一語ずつ対校できるような厳密性を有している。梵語原文にあつて蔵訳では省略されている語も、梵語原文にはないのに蔵訳では付加されている語も存在しない、と言ってよいのである。したがって、蔵訳だけを用いて還梵を行うことは決して不可能なことではない。われわれもまた、降魔品に完全に欠落している6偈について、蔵訳からの還梵を行うものである。

5. 欠落偈頌の還梵

(1) まず、一部欠落の第18偈の場合、6行から成る偈の中の第3行と第4行が欠落している。

その梵語原文は、魔軍襲来を描く場面での、次のような4行詩である。

nīlamukhāni ca pīṭaśarīrāḥ (顔は青く、また、身体が黄色なる者たち)

pīṭamukhāni ca nīraśarīrāḥ (顔は黄色にして、また、身体が青き者たち)

anyamukhāni ca anyaśarīrāḥ (顔が異形にして、また、身体が異形の者たち)

evam upāgata kimkarasainyaṃ (かくの如き、緊迦羅^{キンカウ}の軍勢が来集せり。)

これに対して、蔵訳は、次のような6行詩となっている。

kha bshin sño la lus ni ser ba dañ (顔は青く、また、身体が黄色なる者)
 kha bshin ser la lus ni sño ba dañ (顔は黄色にして、また、身体が青き者)
 kha bshin dkar la lus ni gnag pa dañ (顔は白くして、また、身体が黒き者)
 kha bshin gnag la lus ni dkar ba dañ (顔は黒くして、また、身体が白き者)
 kha bshin gshan la lus kyañ gshan pa dañ (顔が異形にして、また、身体が異形の者)
 de ḥdraḥi phyag brñan dag gi dpuñ nmams lhags (かくの如き、緊迦羅の軍勢が来集せり。)

対照すれば分かるように、梵語原文には第3行と第4行が欠落している。そして、この欠落行の還梵は非常に簡単である。すなわち、第1行と第2行の表現形式を模倣して、次のように還梵できる。

śuklamukhāni ca kālaśarīrāḥ (顔は白くして、また、身体が黒き者たち)
 kālamukhāni ca śuklaśarīrāḥ (顔が黒くして、また、身体が白き者たち)

この偈の韻律は Dodhaka[-~~~~-~~~~-~~~~] であり、その韻律に照らしても間違いなく適合しているので、この還梵は確信を持って間違いないと断言できる。

(2) 次に、一部欠落の第52偈の場合、4行から成る一偈の中の上の3行が欠落している。その原文は、マーラの右側に坐して菩薩に味方するマーラの息子たちの一人であるシッダールタが、マーラを諫める場面に出てくる。それはわずかに1行分の、次のような原文である。

tasmān nivartāmaha tāta sarve (それ故、父よ、全軍を退却させたまえ。)

ところが、これに対応する蔵訳は、次のような4行分となっている。

sku dañ gsuñ dañ thugs kyañ rab tu dag ([菩薩の] 身体も言語も心意も極めて清浄にして、)
 sems can kun la byams paḥi thugs dañ ldan (一切衆生に慈心を有したり。)
 de la mtshon dañ dug gis yon mi tshugs (彼を武器や毒をもって害する能わず。)
 de bas yab cig thams cad bzlog tu gsol (それ故、父よ、全軍を退却させたまえ。)

対照すれば、梵語原文の3行欠落は明らかである。この3行については、上述したように、すでにシャーストリーによる還梵が提示されている。それは次の如くである。

kāye ca vācāya viśuddha citte
 sarveṣu sattveṣu ca maitracetaḥ
 na taṃ ca śāstrāṇi viṣāṇi hiṃse

この偈の韻律は Upajāti[=-~- |~-~|~-~] であり、それに照らしても、シャーストリーの還梵は適切であると言える。ただし、慈心 (byams paḥi thugs) の対応梵語は maitraceta であるよりも maitracitta のほうが適切であると思われるので、第2行目は、

sarveṣu sattveṣu ca maitracittaḥ

と還梵すべきであると思われる。

(3) 最後に、完全欠落の6偈分の還梵が主要な作業となる。

この作業は、蔵訳を参考にして「原語として想定可能な梵語」を見つけ出すことから始めなければならない。可能性のある幾つかの梵語を集めておいて、その中から、韻律に合致するような単語を見つけだし、その単語の格変化による語形を推定し、かつ連声法に従って複合語を作ってみた場合、意味と韻律が間違いなく符合するかどうかを検証するのである。実際に、そのような作業に着手してみると、上述したような「梵語の語彙の豊富さ」や「語順の無規定性」に阻まれて難渋し、作業の結果についても、「正しく復元できた」との確信をもつことから程遠い状況に陥らざるを得ない。しかも、原文が仏教混淆梵語で書かれていたことを前提とすれば、仏教混淆梵語特有の「語形や文法の無規定性」によっても阻まれて、原文として想定可能な文章は幾つもあり、決して一つや二つではあり得ないということを思い知らされるのである。そのような困難さや曖昧さを前提とすれば、われわれの還梵作業も、結局のところ、可能性の一つとしての原文を提示するにすぎないということになる。

蔵訳を参考に原語としての梵語が何であったかを推定する場合の最も重要な情報源が、ロケッシュ・チャンドラの『蔵梵辞典』(Lokesh Chandra, *TIBETAN-SANSKRIT DICTIONARY*, 1959-1961, New Delhi)であることは言うまでもない。この辞典にはチベット語の一単語ごとに、それに対応する梵語例がアルファベット順に掲載されている。その対応関係は一对一である場合もあるが、頻用される単語については複数の対応語例が掲げられているので、原語として想定可能な梵語を見つけ出すのに極めて有益である。ただし、すべての語例が掲げられているというわけではなく、この辞典作成の底本とされた文献から採取されたデータの範囲内での情報に限られていることは当然である。そこで、この辞典には採録されていない語例についても、原語として想定可能な単語を見つけ出す努力が求められることになる。その作業は筆者(還梵作業を行う者)の力量の及ぶ限りの限界内にとどまるのであり、もし力量不足であれば、最も適切な原語を見つけれないままに無理やり還梵するということにもなる。

ロケッシュ・チャンドラの『蔵梵辞典』以外に、参考すべき辞典としては、『梵蔵漢和四訳対校 翻訳名義大集 (*Mahāvvyutpatti*)』、及び『翻訳名義大集梵蔵索引 (*Mahāvvyutpatti, Index*)』(Ed. by R. Sakaki, Kyoto, 1916, 鈴木学術財団)がある。この二冊から成る辞書を併用して、梵語とその蔵訳例の対応関係を検索することができる。また、荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』(講談社, 昭和53年)は、梵語の動詞複合語の接頭辞(Preverb)についての情報を得るのに必須の資料である。梵語の動詞は語幹のみから成る語形の他に、接頭辞のついた複合語で使用する語形が非常に多いので、蔵訳に対応する動詞としてどのような接頭辞のついた動詞複合語が許容されるかを探索しなければならないことがあるが、この『梵和大辞典』は各動詞について接頭辞を付けた語例をほとんど漏れなく掲載しているからである。チベット語と梵語との対応を記載してある辞書としては、芳村修基編『チベット語字典』(昭和50年, 法蔵館)もあるが、収載してあるデータが少ないために援用できる機会が限られるという欠点のあることを否めない。

以上の辞書類を頼りに、完全欠落の6偈について還梵を試みることになる。一偈ずつ蔵訳を示した上で、それに対応すると推定される梵語原文を提示することにする。この6偈の箇所は、上述の第18偈に引き続く部分に当たるので、場面は「魔軍の襲来」であり、韻律も第18偈と同じく *Dodhaka*[-○○-○○-○○-]である。

- ① *stag dañ sbru dañ phag gi gdoñ can dañ* (虎・蛇・豚の顔を有し、)
- glañ po dañ boñ bu rña moñi gdoñ* (象・馬・驢馬・駱駝の顔、)
- smreñu dañ señ ge dred kyi gdoñ can dañ* (猿・獅子・豺^{ハイエナ}の顔を有する者、)
- de ḥdrañi kha gdoñ ldan pañi dpuñ rñams lhags* (かくの如き顔を有する軍勢が来集せり。)

想定される梵語原文

- vyāghrabhujamgavarāhamukhāḥ ca* (また、虎・馬・豚の顔を有する者たち、)
- nāgaturamgakarōṣṭramukhāḥ ca* (また、象・馬・驢馬・駱駝の顔を有する者たち、)
- vānarasimhatarakṣumukhāḥ ca* (また、猿・獅子・豺の顔を有する者たち、)
- tādṛśavaktrabalāḥ samupetāḥ* (かくの如き顔の軍勢が来集せり。)
- (*anuprāptāḥ*)

第3行目の「豺(ハイエナ)」は蔵訳の *dred* に対応するが、*dred* は *ṛkṣa* (熊) と *tarakṣu* (豺) のいずれの訳語としても用いられている。そこで、蔵訳からの訳出を試みる場合、*dred* は「熊」と訳するのが最も無難である。しかし還梵してみると、*ṛkṣa* では韻律に適合する文例をどうしても作ることができないことに気づく。そこで、恐らく原文は *ṛkṣa* ではなく *tarakṣu* であったものと想定される。そこで、還梵した梵語に基づいて訳出すれば、「熊の顔」ではなく「豺(ハイエナ)の顔」となるのである。このように、還梵することによって原語が特定されることがあるという事実は、還梵の意義を考慮するにあたって極めて重要である。

第4行目の「来集せり」に当たる梵語としては *samupetāḥ* と *anuprāptāḥ* の二つの語形が想定されるが、*samupetāḥ* のほうが *anuprāptāḥ* よりも「来集せり」の意味に近いと思われる。

- ② *ral pa brdses la ḥjigs pañi gnod sbyin mañ* (辮髪^{カマ}の逆立てる、恐ろしき多くの夜叉、)
- lug mgo rus pa ḥbar ḥbur lba ba can* (羊の頭・骨・でこぼこの瘤^{カマ}を有し、)
- lus ni mi yi khrag gis rab tu sbags* (身体が人間の血にまみれたる、)
- gnod sbyin de ḥdra ba dag der yañ lhags* (かくの如き夜叉たちが、そこに来集せり。)

想定される梵語原文

- uccasaṭāḥ bahu bhairavayakṣāḥ* (辮髪^{カマ}の逆立てる、多くの、恐ろしき夜叉、)
- eḍaśirāsthighaṭāgalagaṇḍāḥ* (羊の頭・骨・でこぼこの瘤^{カマ}を有し、)
- mānavaṣaṇitarakṭaśarīrāḥ* (人間の血にまみれたる身体を有する、)
- tādṛśayakṣa tahim samupetāḥ* (かくの如き夜叉たちが、そこに来集せり。)
- (*hi tatra ca prāptāḥ*)

第4行目の「そこに来集せり」の原文としては、*tahim samupetāḥ* の他に、*tahim anuprāptāḥ*

または hi tatra ca prāptāḥ も想定できるが、tahiṃ samuṣṭāḥ が最も無難ではないかと思われる。tahiṃ anuṣṭāḥ と還梵する場合は、tahiṃ の末尾の鼻音が母音 (a) の前であるにも拘わらず anusvāra(m) に変化して長音化するという韻律上の特例を認めなければならない (cf. F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, §2.64)。なお、tahi も tahiṃ も、tad の loc.(tasmin, tatra) と同じ意味で用いられる仏教混交梵語である (cf. F. Edgerton, *op. cit.*, §21.22)。

③ rkaṅ pa dag ni rgo baḥi pa ḥdra (足は羚羊の脚の如く、)

mig gi ḥbras bu spreḥuḥi mig daṅ mtshuṅs (瞳孔は猿の眼に類似し、)

mche ba ni glaṅ poḥi mche ba ḥdra (歯は象の牙齒の如くなる、)

de ḥdraḥi dpuṅ rnam der yaṅ lhags (かくの如き顔の軍勢が、そこに来集せり。)

想定される梵語原文

yeṣa padā mṛgajāṅghanikāśāḥ (足は羚羊の脚に似たる、)

yeṣa ca tāraḥ vānaratulyāḥ (また、瞳孔は猿の如くにして)

yeṣa ca danta mataṅganikāśāḥ (また、歯は象に似たる)

te itivaktrabalāḥ tahi prāptāḥ (かくの如き顔の軍勢が、そこに来集せり。)

蔵訳第 1 行目の rgo ba (= dgo ba) は「羚羊」(antelope) の意味である。これに充てた梵語 mṛga は「鹿」と訳されることが多いが、『梵和大辞典』によれば、通常の意味は「かもしか」である。

梵語第 4 行目の iti-vaktra は、iti-krama (このような方法)、iti-nāman (このような名前) などの用法を参考に、「このような顔」(かくの如き顔) の意味で使用できると見なした。

④ lus kyi dbyibs ni chu srin ḥdra ba ste (身体の形状は摩竭魚の如くにして、)

mig gi ḥbras bu gñis ni rab tu ḥbar (二つの瞳孔はめらめらと燃え、)

rna ba dag ni ra yi rna ba ḥdra (耳は山羊の耳の如くなる、)

kha gdoṅ de ḥdraḥi dpuṅ rnam der yaṅ lhags (かくの如き顔の軍勢が、そこに来集せり。)

想定される梵語原文

yeṣa ca kāya yathā makarāṅgāḥ (また、身体はマカラの肢体の如くにして、)

locanatāraḥ dve jvalamāne (二つの眼の瞳孔はめらめらと燃え、)

yeṣa ca karṇa yathā ajakarṇāḥ (また、耳は山羊の耳の如くなる、)

te itivaktrabalāḥ tahi prāptāḥ (かくの如き顔の軍勢が、そこに来集せり。)

第 2 行目の -tāraḥi の末尾の語形は、-tāraḥ(Nom. dual neuter) の韻律上の用法 (m. c.) として用いた (cf. F. Edgerton, *op. cit.*, §8.77)。

⑤ kha cig dag ni lag na dbyig pa thogs (ある者たちは、手に棍棒を持ち、)

tho ba mduṅ thuṅ rtse gsum lag na thogs (槌・槍・三叉戟を手に持ち、)

kha cig ri bo lhun po lag na thogs (ある者は、メール山を手に持ち、)

ḥjigs su ruṅ baḥi gzugs can gnod sbyin lhags (見るも恐ろしき形相を有する夜叉が来集せり。)

想定される梵語原文

keci ca daṇḍa bhujēṣu gṛhītvā (また、ある者たちは手に棍棒を持ち、)

mudgaraśaktipināku gṛhītvā (槌・槍・三叉戟を持ち、)

kaści ca meru bhujē pariṅhya (また、ある者は、メール [山] を把持して)

bhairavarūpakayakṣa hi prāptāḥ (実に、恐ろしき形相の夜叉たちが来集せり。)

第1行目の主語は複数形 keci (= kecid; ある者たちは) であり、第3行目の主語は単数形 kaści (= kaścid; ある者は) である。蔵訳でも、第1行目には複数を表す dag が付加されているが、第3行目にはそれがないことから、明瞭に区別されていることが分かる。第2行目の -pināku の末尾の語形は、-pinākam(Acc. sg. neuter) の韻律上の用法として用いた (cf. F. Edgerton, *op. cit.*, §8.30)。ただし、同書 §8.31によれば、-pināka でも可である。

- ⑥ gśol thogs ḥkhor lo thogs śiñ mig bsgyur dañ (鋤を持ち、円盤を持ちて、眼をぎよろつかせ、)
- ri rtse chen po lag na thogs pa dañ (大きな山の峰を手に持ちて、)
- rluñ dañ rdo dañ gnam lcags rab ḥbebs śiñ (風・石・雷電を激しく降らせながら、)
- gnod sbyin hjiḡs su ruñ ba der yañ lhags (見るも恐ろしき夜叉が、そこに来集せり。)

想定される梵語原文

cakrahaṃdhara locanavṛttāḥ (円盤と鋤を持ち、眼をぎよろつかせ、)

śailamahāśikharān bhujadhārāḥ (大きな山の峰を手に持ちて、)

vāyuśirāśani duḥṣṭhu sṛjantaḥ (風・石・雷電を激しく降らせながら、)

bhairavayakṣa tahiṃ samupetāḥ (恐ろしき夜叉たちが、そこに来集せり。)

蔵訳の第1行目では、gśol (鋤) が前で、ḥkhor lo (円盤) が後の語順であるが、梵語原文では cakra (円盤) を前に hala (鋤) を後に置いてある。hala を前に置くと韻律に合わなくなるからである。gśol (鋤) に対応する最も普通の語彙として lāṅgala があるので、第1行目を、

lāṅgalacakradharā cakṣuvṛttāḥ

と還梵することが可能であるが、この場合は cakṣu (眼) の ca が短音と見なされる必要がある。

第3行目の duḥṣṭhu は使用頻度の低い言葉であるが、Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary* (1899, Oxford) に、badly (とても、ひどく) の意味の副詞として記載されている (p.483)。もし、もっと使用頻度の高い語彙である atīva や tīvra を用いるならば、第3行目を、

vāyuśirāśani tīva sṛjantaḥ または vāyuśirāśani tīvru sṛjantaḥ

と還梵することも可能である。

また、上に検討した②の第4行目と同じく、本偈第4行目の tahiṃ samupetāḥ を tahiṃ anuprāptāḥ と還梵することも可能である。

おわりに

以上、ラリタヴィスタラの降魔品に見られる欠落偈頌の還梵作業を試みたのであるが、これらの偈は、幸いにも音節数がわずか11音から成り、韻律も比較的簡単な構造であるために、作業が多いに助けられたと言わざるを得ない。もし、もっと多くの音節数から成る複雑な構造の韻文であれば、それを正確に還梵することは非常に困難であると思われる。正確に還梵するために求められる言語学上の知識は膨大であり、梵語のみならずチベット語や漢文にも深く通暁した専門家でなければならぬからである。特に仏教混淆梵語の、無規定的に見えながらも、決して無限定に何でも許容されるわけではない文法構造を正しく把握していなければ、仏教混淆梵語で書かれた韻文を復元することは不可能である。

われわれの還梵作業からも明らかなように、可能性のある原文はただ一つというわけではなく、幾つかの原文を想定することができるのであるが、果たしてその中のどれが原文であったか、それとも全く異なる表現のものであったのか、それは知る術は全くない。結局のところ、還梵という作業の困難さを痛感させられるのみである。

参考文献

- ①那須實秋「唯識二十論の還梵」(『印度学仏教学研究』3号, 1953, 113-114頁)
- ②「辻直四郎著作集 第四卷 言語学」(1982, 法蔵館)
- ③溝口史郎『ブツダの境涯』(1996, 東方出版)
- ④山岸俊岳「『ラリタヴィスタラ』降魔品の和訳」(『仏学会報』第11号, 高野山大学仏教学研究室, 昭和60年, 71-98頁)
- ⑤荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』(昭和53年, 講談社)
- ⑥芳村修基編『チベット語字典』(昭和50年, 法蔵館)
- ⑦外崗幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』(平成6年, 大東出版社)
- ⑧『梵蔵漢和四訳対校 翻訳名義大集 (Mahāvīyūtpatti)』:『翻訳名義大集梵蔵索引 (Mahāvīyūtpatti, Index)』(1916, Ed. by R. Sakaki, Kyoto, 鈴木学術財団)
- ⑨ Ph. Édouard Foucaux, *Rgya TchFer Rol pa ou Développement des Jeux contenant l'histoire du Bouddha Çakya-Mouni*, Première Partie-Texte Tibetan, Paris, 1847; Deuxième Partie- Traduction Française, 1848.
- ⑩ Ph. Édouard Foucaux : *Le Lalita Vistara* (Annales du Musée Guimet, Tome sixième), Paris, 1884.
- ⑪ Rajendralala Mitra : *The Lalita Vistara* (Bibliotheca Indica Work No. 15, Calcutta, 1877).
- ⑫ S. Lefmann : *Lalita Vistara* I & II, Halle, 1902 & 1908.
- ⑬ P. L. Vaidya : *Lalita-Vistara* (Buddhist Sanskrit Texts No.1), Darbhanga, 1958.
- ⑭ Śāntibhikṣu Śāstri : *Lalitavistara*, Lucknow, 1984.
- ⑮ Lokesh Chandra: *TIBETAN-SANSKRIT DICTIONARY*, New Delhi, 1959-1961.
- ⑯ Monier-Williams: *Sanskrit-English Dictionary* (Oxford, 1899)
- ⑰ F. Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar; Vol. II : Dictionary, New Haven, 1953.